

Special Essay

榎の有る

医学部長 永田見生

榎（えのき）はニレ科の落葉高木で直径は1～3メートル、高さは20メートルに達する。関東以南の暖地に多く、葉は非対称の卵円形で初夏には淡黄色の雌花と雄花をつけ、秋には橙色で小豆大の甘い実を結ぶ。樹皮の煎汁は通経や進食に効用がある漢方薬の朴樹で、若葉は飯とともに炊いて食用にもなる。材は薪炭や家具にもなり、江戸時代には街道の一里塚に植えられていた。基礎2号館の前に、平成3年の台風で幹が折れた大木がある、これが榎である。1928年の篠山城から九州医学専門学校校舎（現在の本部）の建設時を撮った写真では、西側に木は全くなく道も狭い。校舎の東側にはやや広い道と家屋や数本の大きな木があるが、その先は見渡す限りの筑後平野である。北側の筒川（教育1号館の南）の土手には雑草が繁っている。1950年の写真では、大学本部前の道路は拡大され、あの榎と、現在のPETセンターの位置に大きな木がある。1985年から入院された真藤アヤさん（1912-1993）に、医大には医専建設前からの古い木が2本の残っていることを聞いたことを覚えている。PETセンター建設時に切られた1本は棕（むく）の大木で、高さが臨床研究棟5階の整形外科医局に達し野鳥が沢山来ていた。

真藤アヤさんは、元NTT会長の真藤恒氏（1910-2003）の妹で終生独身であった。彼女は現在の久留米市国分町に生まれ、坂本繁二郎画伯に14

歳から師事した画家であるが、郷土史の研究家でもあり、久留米の方言を集めた民俗誌、初手物語「初手はの」の執筆者でもある。初手物語は明治18年に国分で生まれた母親の真藤ミチヨさんが口述した方言や古い言葉を娘のアヤさんが収録したもので、1972年初版、1976年に再版されている。「これ以上は非才の私に取っては荷が勝ちすぎている」との再版時のあとがきには、彼女の謙虚さと見識の高さが窺える。絵画の画風は坂本画伯に似ており、寄贈された油絵を病院本館9階のディールームに展示している。

古から有る木の中で1本だけが残った榎は、コンクリートで囲まれ、宿り木と根上がり認め生育が憂慮される。「エノキ」の和名の由来は宿り木の寄宿し易さからの崇木（たたえのき）との説がある。郷土を愛した真藤さんは、「古くからある木は大事にして」と懇願されていた。旭町キャンパス将来構想に、患者さん、教職員、学生が清々しく散歩できる榎と繋がる道のあるマスタープランを考えて戴きたい。大木は何か為すことを期待するものではない、唯、有るだけでよい。

